



TITLE:

マスカット葡萄の拒絶・忍び泣く 葡萄酒：『若き芸術家の肖像』にお けるスティーヴンの芸術的聖体拝 領

AUTHOR(S):

小島, 基洋

CITATION:

小島, 基洋. マスカット葡萄の拒絶・忍び泣く葡萄酒：『若き芸術家の肖像』におけるスティーヴンの芸術的聖体拝領. Albion 2013, 59: 48-58

ISSUE DATE:

2013-11-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/198145>

RIGHT:

発行者の許可を得て登録しています.

マスカット葡萄の拒絶・忍び泣く葡萄酒

——『若き芸術家の肖像』におけるスティーヴンの芸術的聖体拝領*

小 島 基 洋

ジェイムズ・ジョイス (James Joyce) は初の長編小説『若き芸術家の肖像』(*A Portrait of the Artist as a Young Man*, 1916)¹⁾の中で、それまでの人生を一人の主人公に託した。スティーヴン・ディーダラス (Stephen Dedalus) と名付けられたその人物は、作者がそうであったように、教会から離れ、芸術家として生きる決意をする。しかし、カトリックの教義が根強く残る十九世紀末のダブリンに育った彼(ら)にとっ

—Do you believe in the eucharist? Cranly asked.

—I do not, Stephen said.

—Do you disbelieve then?

—I neither believe in it nor disbelieve in it. Stephen answered. (260)

決別したはずのカトリックの儀式・聖体拝領を、スティーヴンの創作原理として再活用するジョイス。本論ではその妙技を跡付けてみたい。

1. マスカット葡萄の拒絶 ——『モンテ・クリスト伯』の影響

幼き日のスティーヴンはカトリック作家アレクサンドル・デュマ (Alexandre Dumas) の『モンテ・クリスト伯』(*The Count of Monte Cristo*, 1844-46) に熱中している。日本でも『岩窟王』の名で知られるこの作品は、主人公ダンテスの失われた恋と壮絶な復讐の物語である。青年ダンテスは美しい恋人メルセデスとの結婚を目前にしながら、あらぬ嫌疑によって十四年もの牢獄生活を余儀なくされる。その後、脱獄

* 本稿は2012年11月10日に行われた京大英文学会年次大会において「ジェイムズ・ジョイスと聖体拝領——『若き芸術家の肖像』を中心に」というタイトルで口頭発表した内容に加筆修正をしたものである。

1) 本書からの引用ページは()内に数字で示す。

を果たして財宝を手に入れるものの、モンテ・クリスト伯を名乗って再び彼女の前に現れた時には、想いを寄せたメルセデスは既に人妻となっていた。そんな彼ら二人の感傷的な再開を、スティーヴン少年は空想の中で再現する。

His [Stephen's] evenings were his own: and he pored over a ragged translation of *The Count of Monte Cristo*. . . . and in his [Stephen's] imagination he lived through a long train of adventures, marvellous as those in the book itself, towards the close of which there appeared an image of himself, grown older and sadder, standing in a moonlit garden with Mercedes who had so many years before slighted his love, and with a sadly proud gesture of refusal, saying:

—Madam, I never eat muscatel grapes. (下線筆者; 64-65)

メルセデスの邸宅で開かれる夜会に現れたモンテ・クリスト伯。彼になりきったスティーヴンは、かつて想いを寄せた —— そしてその想いを裏切った —— 恋人が勧めるマスカット葡萄を「悲しげで誇り高き拒絶の身振り」(“a sadly proud gesture of refusal”)と共に拒む。

長大な物語の中から唯一、引用される伯爵の台詞「奥様、私は決してマスカット葡萄はいただきます」(“Madam, I never eat muscatel grapes”) —— この言葉がスティーヴンに及ぼした影響は、次のような場面に見出すことができるかもしれない。一頁前に戻ろう。そこにはチャールズ叔父さんと買い物に出かけた幼いスティーヴンの姿がある。

He [uncle Charles] would seize a handful of grapes and sawdust or three or four American apples and thrust them generously into his grandnephew's hand while the shopman smiled uneasily; and, on Stephen's feigning reluctance to take them, he would frown and say:

—Take them, sir. Do you hear me, sir? They're good for your bowels. (下線筆者; 63)

林檎と共に、「葡萄」(“grapes”)を手渡された少年スティーヴンは —— もちろん最終的には受け取るのだろうが —— あえて拒絶の身振りを「装う」(“feigning reluctance”)。

あるいは、伯爵のマスカット葡萄への拒絶が、メルセデスからの愛の拒絶を意味することを考えれば、次の描写にも例の台詞の痕跡を見出すことが可能だ。少年期の終わりを迎え、現実の少女エマ(“E—C—”と記述される)に恋い焦がれるスティーヴンは、彼女に捧げる愛の詩を創作する。

The next day he sat at his table in the bare upper room for many hours. Before him lay a new pen, a new bottle of ink and a new emerald exercise. . . . On the first line of the page appeared the title of the verses he was trying to write: To E— C—. . . . But his brain had then refused to grapple with the theme and, desisting, he had covered the page with the names and addresses of certain of his classmates:

(下線筆者: 73)

最終的には二人の恋愛詩を完成させるスティーヴンだが、その創作過程で一旦、集中力が途切れ、筆が止まる。この時、彼の頭脳が「拒絶」した(“refused”)のは、愛のテーマに「取り組む」(“grapple”)ことである。ここで用いられる動詞“grapple”は、綴りから予測されるように、“grape”と語源的に同系語(原義は「鉤」)である²⁾。恋する詩人スティーヴンは憧れのモンテ・クリスト伯にならって、〈葡萄の拒絶〉³⁾をその言葉の奥底で演じているのだ——という解釈は、あるいは読者の深読みに過ぎるのかもしれない。

しかし、エマを想うスティーヴンが、悲恋の主人公ダンテスを一貫して意識していたことは、やはり疑い得ないだろう。気まづい関係に陥っていたエマとの最後の邂逅が記された日記を引用する。

APRIL 15: Met her today pointblank in Grafton Street. . . . Asked me was I writing poems? About whom? I asked her. . . . In the midst of it unluckily I made a sudden gesture of a revolutionary nature. I must have looked like a fellow throwing a handful of peas into the air. People began to look at us. She shook hands a moment after and, in going away, said she hoped I would do what I said.

Now I call that friendly, don't you?

Yes, I liked her today. A little or much? Don't know. I liked her and it seems a new feeling to me.

(下線筆者: 274-75)

エマに恋い焦がれながらも、その真の姿に幻滅しつつあった青年スティーヴンは、そのぎくしゃくとした会話の途中で「不運にも」「突然、革命家じみた身振り」をしてしまう。憧れのモンテ・クリスト伯のように「悲しげで誇り高き拒絶の身振り」をする

2) ジョイスが愛読した Skeat の語源辞典を参照すると、“grapple”の語源的説明がされた後で、“grape”の項を参照するよう指示がある。

3) Skeat の語源辞典は、“refuse”の語源はラテン語“*refundere*”であるという説を紹介し、その意味を“pour back”(注ぎ返す)であるとしている。そうであれば、“refuse to grapple”という表現は、「葡萄(酒)を注ぎ返す」という意味を隠し持っていることになり、次セクションで論述する〈聖体拝領の拒否〉というテーマにもつながっていく。

ことには——あれほどシミュレートしたにも関わらず⁴⁾——失敗しているのだが、自分とエマの別れは「友好的」(“friendly”)であったのだと満足するスティーヴンの様子は、我々を『モンテ・クリスト伯』のテキストに連れ戻す。そこには、庭になる果物を拒絶し続ける伯爵に傷ついたメルセデスが「自分たちは友達ではないのか」と問い詰める場面がある⁵⁾。

... ‘But,’ said the countess, breathlessly, with her eyes fixed on Monte Cristo, ... ‘We are friends, are we not?’

The count became pale as death, ... ‘Certainly, we are friends,’ he replied; ‘why should we not be?’
(Dumas, 556)

芸術家として旅立つスティーヴンは、エマとの関係を些か強引にも、美しき友情として解釈している。そこにはモンテ・クリスト伯の強い影響がうかがわれる。恋の終りが、愛読書『モンテ・クリスト伯』のエピソードを介して、友情の始まりになっているのだ⁶⁾。

しかしながら、小説『モンテ・クリスト伯』が「若き芸術家」スティーヴンに与えた影響⁷⁾を彼の恋愛事情だけに限定するのは、片手落ちの感が否めない。更なる探求

- 4) 伯爵とメルセデスの再会場面をスティーヴンはいたく気に入っているようで、少年期の終わりに差ししかかってもなお、「悲しげで誇り高き拒絶の身振り」を空想していた。“He saw again the small white house and the garden of rose-bushes on the road that led to the mountains and he remembered the sadly proud gesture of refusal which he was to make there, standing with her in the moonlit garden after years of estrangement and adventure.” (下線筆者；105-06)
- 5) 果物を受け取ろうとしない伯爵に対し、メルセデスは「同じ屋根の下でパンと塩を分け合った者は永遠の友達になる」というアラビアの習慣を持ち出すものの、伯爵は「ここはアラビアではない」というつれない返事を返す。そこで夫人は「では、私たちは友達ではないのか」という問いを発することになる。(Dumas, 555-56)
- 6) 『モンテ・クリスト伯』のダンテスとメルセデスの和解がなければ、スティーヴンとエマの「友情」は描かれえなかったかもしれない。『若き芸術家の肖像』の原型となった習作『スティーヴン・ヒーロー』(Stephen Hero) では、スティーヴンが衝撃的な告白——「一夜だけと一緒に過ごし、翌朝になれば別れを告げて二度と会わないようにしよう」(Joyce, Stephen Hero, 198)——をしたせいで、エマとの関係は修復不可能なまでに破綻していく。『スティーヴン・ヒーロー』の中で絶縁状態に陥った二人を、ジョイスが『若き芸術家の肖像』の最後で救済しようとするための仕掛けが、『モンテ・クリスト伯』の導入だったのではないか。
- 7) 『モンテ・クリスト伯』が『若き芸術家の肖像』に与えた影響について言及した文献は複数ある。たとえば、主人公モンテ・クリスト伯が国籍や言語に縛られないエグザイルであった点を、スティーヴンのアイルランド出国との関連で指摘した Kershner や Seidel。あるいは、薔薇のモチーフを軸に、メルセデスをベアトリーチェ、聖母マリアなど複数の女性との関連で論じた Seward など。ただし、いずれも「友情」の問題には立ち入っていない。

のために、もう一度、例の台詞に立ち返ってみよう。

2. 葡萄酒くさい息 —— 聖体拝領の拒絶

モンテ・クリスト伯の台詞「奥様、私は決してマスカット葡萄はいただきません」に、スティーヴンの宗教への決別を読んだ批評家にヒュー・ケナー (Hugh Kenner) がいる⁸⁾。葡萄の拒絶と宗教への拒絶、一見すると無関係に見える両者の中間に、カトリックの秘儀・聖体拝領を配置すれば、その関連性を見出すことは確かに不可能ではない。

たとえば、幼少期のスティーヴンは自らの初聖体の日をこんな風に振り返っている。

Because on the day when he had made his first holy communion in the chapel he had shut his eyes and opened his mouth and put out his tongue a little : and when the rector had stooped down to give him the holy communion he had smelt a faint winy smell off the rector's breath after the wine of the mass. The word was beautiful : wine. It made you think of dark purple because the grapes were dark purple that grew in Greece outside houses like white temples. But the faint smell of the rector's breath had made him feel a sick feeling on the morning of his first communion.

(下線筆者；47)

幼きスティーヴンにとって、初めての聖体拝領の記憶は、校長の葡萄酒くさい息の匂いと共にある。葡萄酒への生理的嫌悪感を、後に彼が聖体拝領を拒絶することの予兆と捉えることは可能だろう（同時に、彼の「言葉」の響きへの陶醉には着目しておいてもよい）。

後年、校長に呼び出された青年スティーヴンは、「天なる神を祭壇へ呼び出し、パンと葡萄酒の形をとらしめる権能と権威」(“the power, the authority, to make the great God of Heaven come down upon the altar and take the form of bread and wine” 171) をもつ聖職の道を勧められるものの、悩んだ末に「僕は決して聖職者として聖櫃の前に香炉を振ることはない。僕の運命は社会と宗教の秩序から逃れることにある」(“He would never swing the thurible before the tabernacle as priest. His destiny was to be elusive of social or religious orders.” 175) と考える。このように、スティーヴンにとって聖体拝領はカトリック信仰の象徴的存在であり、更には実際の躓きの石ともなっていく。聖職者になるどころか、信者としての信仰も次第に揺らいでいくスティーヴ

8) Kenner は「私はマスカット葡萄を決していただきません」という台詞を聖体拝領の拒絶と関連付けて読むことの可能性を示唆している。本セクションではそれを具体的に論じていく。

ンは、親友克蘭リーとこんな会話を交わしている。

—... She [my mother] wishes me to make my easter duty.

—And will you?

—I will not, Stephen said.

—Why not? Cranly said.

—I will not serve, answered Stephen.

(下線筆者；259-60)

ここで言及される「復活祭の義務」(“easter duty”)とは、自らの罪を教会で告白した上で、聖体を拝領することである。スティーヴンは母の願いを聞き入れることもなく、カトリック教会に別れを告げる。それは同時に、当時のアイルランドに居場所を失っていくことをも意味した。こうして彼は芸術家として立つべく、一人祖国を離れ、大陸へと旅立つことになる。

葡萄酒の匂いにむかつきを覚えた幼き日のスティーヴンは、やがて大人になると自らの意志で聖体拝領を拒絶することになる。そこには一貫して、モンテ・クリスト伯の台詞「私はマスカット葡萄酒はいただきますません」のかすかな響きを聞き取ることができる。

3. 忍び泣く葡萄酒 —— 芸術的聖変化

宗教的儀式としての聖体拝領を拒絶するスティーヴンであるが、その神秘的な儀式は密かに彼の創作原理の中に取り入れられていくこととなる。芸術的聖体拝領が、宗教的聖体拝領に取って代わるのだ。

その一例を、以下の引用の中に見出してみよう。大学への通学途中でスティーヴンが創作した奇矯な五行詩である。

The ivy whines upon the wall,
And whines and twines upon the wall,
The ivy whines upon the wall,
The yellow ivy upon the wall,
Ivy, ivy up the wall.

(下線筆者；193)

この不可思議な詩を説明するポイントは、おそらく、三度繰り返される“whines”(「忍び泣く」)という単語にある。この語は主語“ivy”(「蔦」)⁹⁾の動詞として用いられ

9) 五行詩冒頭“The ivy”がスティーヴンの頭に浮かんだ理由については、彼が歩いていた北ストランド通りに“the Ivy Church”という教会があったからだというBidwellの説明がある。

るのだが、「忍び泣く蔦」というのも奇妙なイメージである。この発想は何に由来するのだろうか。

「蔦」が登場する場面とえば、幼少期のスティーヴンに次のような記憶がある。

There were coloured lanterns in the hall of his father's house and ropes of green branches. There were holly and ivy round the pierglass and holly and ivy, green and red, twined round the chandeliers. There were red holly and green ivy round the old portraits on the walls. Holly and ivy for him and for Christmas.

Lovely...

(下線筆者：18)

スティーヴンが想像するクリスマスの光景の中には、後年に五行詩の基本モチーフとなった“ivy”“twine(d)”“on the wall”が、確かにすべて——ただし“whine”を除いて——出揃っている。

では、五行詩の鍵語であるはずの“whine”という単語はどこから混入してきたのだろうか。その答えはおそらく——既に予想がつくかもしれないが——聖体拝領に不可欠な、そして彼が拒絶せざるをえなかった、“wine”だ。幼き日に、その強烈な匂いにも関わらず、「美しい」と感じたあの言葉である(“The word was beautiful: wine.” 47)。つまり、この五行詩の中でスティーヴンが行なっているのは、音的連鎖によって、“wine”を“whine”に〈変化〉させ、そして“whine”から“twine”へと〈変化〉させる聖変化のパロディーなのである¹⁰⁾。メルセデスの葡萄を拒むモンテ・クリスト伯しながら、教会で聖別された葡萄酒に口をつけることのないスティーヴンではあるが、言葉の上では、自ら葡萄酒を聖別する司祭となるのだ。

4. 許されない罪、毒々しい香り、弱々しい歌 —— 反転する聖体拝領

葡萄酒の言語的聖変化——前セクションで提示したこの読みを裏付けるためには、五行詩の直前の段落、大学に向かうスティーヴンが路上で空想にふけっている場面を参照する必要があるだろう。そこには、聖体拝領に関連するイメージ——〈告解〉〈聖櫃〉〈聖歌〉——が周到に配置されている。

... Stephen, remembering swiftly how he had told Cranly of all the tumults and unrest and longings in his soul, day after day and night by night, only to be answered

10) whine, twine といった単語の中に、wine という音が聞こえると述べた O'Leary の論文には言及しなくてはならない。O'Leary は、そこから ivy と共に育つ vine を想起しているのだが、聖体拝領との関連性は想定していないようだ。

by his friend's listening silence, would have told himself that it was the face of a guilty priest who heard confessions of those whom he had not power to absolve but that he felt again in memory the gaze of its dark womanish eyes.

Through this image he had a glimpse of a strange dark cavern of speculation but at once turned away from it, feeling that it was not yet the hour to enter it. But the nightshade of his friend's listlessness seemed to be diffusing in the air around him a tenuous and deadly exhalation and he found himself glancing from one casual word to another on his right or left in stolid wonder that they had been so silently emptied of instantaneous sense until every mean shop legend bound his mind like the words of a spell and his soul shrivelled up sighing with age as he walked on in a lane among heaps of dead language. His own consciousness of language was ebbing from his brain and trickling into the very words themselves which set to band and disband themselves in wayward rhythms :
(下線筆者：192-93)

スティーヴンは親友クランリーの容貌を思い浮かべ、それを「免罪してやれない者たちの告白に耳を傾ける罪深き聖戦者の顔」だと考える（〈告解〉）。更に、クランリーの物憂げな様子が毒を「空気中に撒き散らしている」様を想像し（〈香炉〉）、街に溢れる看板の「死んだ言語」（ラテン語を示唆するか）¹¹⁾ を目にしながら、思わず声の混じった吐息——「溜め息」——を漏らす（〈聖歌〉）。

事前に必ず済ませておくべき〈告解〉は言うまでもなく、〈香炉〉と〈聖歌〉は聖体拝領の儀式の重要な要素である。実際、スティーヴンの記憶に「生徒が香炉を振ると、香が煙となって両側から立ち上り、聖歌隊にいるドミニク・ケリーが最初のパートを独唱した」（“... the incense went up in clouds at both sides as the fellow swung the censer and Dominic Kelly sang the first part by himself in the choir.” 47）というものがあ

る。以上のことから、五行詩とその前段落におけるスティーヴンの思考の中に、聖体拝領のプロセスが埋め込まれていたことが分かるだろう。〈告解〉が行われた後に、司祭クランリーによって〈香炉〉が振られ、信徒スティーヴンが〈聖歌〉を歌う。そんな中で葡萄酒が徐々に形を変えて、忍び泣きながら絡みついていくのである。許されない罪、毒々しい香り、弱々しい歌、そして忍び泣く葡萄酒——ここで行われているのは、神々しい〈宗教的〉聖体拝領のすべてがネガティブなイメージへと反転した〈芸術的〉聖体拝領なのだ。

11) 「死んだ言語」とラテン語の関係は、当日、司会を務められた横内一雄氏に指摘して頂いた。

5. 光り輝く蔦 —— 混交する錬金術

五行詩を創作しながら聖体拝領を再現した「若き芸術家」ステイーヴンは、明け方の自室で、エマに捧げるヴィラネルを創作するのだが、その際に自らをこう称している。

... a priest of eternal imagination, transmuting the daily bread of experience into the radiant body of everliving life. (下線筆者；240)

「永遠の想像力の司祭」—— 芸術的聖体拝領を行うステイーヴンは、自らの創作活動を「日々の経験というパンを永久に生き続ける命をもった光輝く肉体に変える」という聖変化のイメージで語る。この時、彼が「変える」という単語に、聖体変化を示す“transubstantiate”ではなく、錬金術の用語“transmute”を用いていることは興味深い。また、パンから生み出された肉体が「光り輝く」(“radiant”) ことにも着目しておく必要があるだろう。どうやら、ステイーヴンの芸術的聖体拝領には錬金術のイメージが混交しているのである。

それを踏まえた上で、再び、例の五行詩に戻ろう。創作直後にステイーヴンは自らの作品について —— さすがに自嘲気味ではあるが、読者はそれに騙されてはならない —— このような感想を漏らす。

Did any one ever hear such drivell? Lord Almighty! Who ever heard of ivy whining on a wall? Yellow ivy; that was all right. Yellow ivory also. And what about ivory ivy?

The word now shone in his brain, clearer and brighter than any ivory sawn from the mottled tusks of elephants... (下線筆者；193)

ここで、五行詩に登場した“ivy”が、ステイーヴンの頭の中で、“ivory”のイメージに〈変化〉していった理由はもう明らかだろう。「蔦」が「象牙」になる理由 —— それはおそらく、“ivy”に“or” (フランス語で「金」) を足したものが“iv-or-y”だからだ。忍び泣いていた緑の蔦は、明度を増すことによって「黄色い蔦」になり、「黄色い象牙」となる。そして「象牙色の蔦」になった時に「象のまだらな牙から切り出されたどんな象牙よりも、より鮮やかにより明るく」「光を放つ」のである¹²⁾。

12) 本論とは全く違った方向性の読みとして、Maud Ellmann のものが挙げられる。彼女は五行詩とその前後の段落の言語に、循環する体液や呼吸のイメージを読み込む。

終 わ り に

若きスティーヴンの芸術的な極点を「忍び泣く薦」の五行詩に求めるのは —— それ
が前後の段落を含めて巧妙な芸術的〈聖体拝領/鍊金術〉になっているとしても ——
やはりフェアではないだろう。彼が少女エマを想いながら創作したヴィラネルを最後
に参照しておきたい。

*Are you not weary of ardent ways,
Lure of the fallen seraphim?
Tell no more of enchanted days.* (242)

こうして始まる十九行詩は、エマと思しき女性の肉体的魅力と、それに魅了されるこ
とへの抵抗をテーマとしている。「熾天使たち」をも墮落させるその魔性を前にして、
モンテ・クリスト伯のような決然たる「拒絶」をすることは容易ではない。

その一方で、この詩の中には明白に聖体拝領のイメージが織り込まれていく。〈香
炉〉が焚かれ —— 「炎の上に賛美の煙が / 海より立ち上る、海原を覆い尽くして」
（“Above the flame the smoke of praise / Goes up from rim to rim.”）——、〈聖歌〉が歌
われ —— 「我らの切れ切れの叫び声と悲しげな歌は / 立ち上って聖体の賛歌となる」
（“Our broken cries and mournful lays / Rise in one eucharistic hymn.”）——、そして遂
に〈聖杯〉が満たされる。

*While sacrificing hands upraise
The chalice flowing to the brim,
Tell no more of enchanted days.* (243)

この箇所にもやはり、モンテ・クリスト伯の台詞の影響を指摘することが可能だ。聖
体拝領のヴィジョンは、両の手で掲げた聖杯を傾け、その液体が溢れださんとするそ
の瞬間までしか描かれていない。スティーヴンは —— この時に空想した「光り輝く」
（“radiant” 242）エマの魅力に抗い得るかどうかは別としても —— 少なくとも、その
詩的ヴィジョンの中では、「決して」葡萄酒を口にする事はない¹³⁾。

子供の頃に熱中した『モンテ・クリスト伯』の台詞「奥様、私は決してマスカット
葡萄はいただきます」は、こうして芸術的聖体拝領の司祭スティーヴンの代表作で

13) 『若き芸術家の肖像』3章の終わりでも同じ現象が起こっている。罪を告白した上で、聖体拝
領に臨むスティーヴンの目の前にチボリウム（聖体の容器）が到達した瞬間（“The ciborium
had come to him.” 158）に章が終わり、実際に口に入れる場面は描かれていない。

あるヴィラネルにまでその痕跡をとどめているのである。

参考文献

- Bidwell, Bruce. and Linda Heffer. *The Joycean Way: A Topographic Guide to "Dubliners" and "A Portrait of the Artist as a Young Man"* (Dublin: Wolfhound Press, 1981), p. 49.
- Dumas, Alexandre. *The Count of Monte Cristo* (London: Wordsworth Classics, 1997)
- Ellmann, Maud. "The Name and the Scar: Identity in *The Odyssey* and *A Portrait of the Artist as a Young Man*" in *James Joyce's "A Portrait of the Artist as a Young Man": A Casebook*, ed. Mark A. Wollaeger, (Oxford: Oxford University Press, 2003), pp. 166-67.
- Joyce, James. *A Portrait of the Artist as a Young Man* (London: Penguin Books, 1992)
- . *Stephen Hero* (New York: New Directions Publishing, 1963)
- Kenner, Hugh. *Dublin's Joyce* (New York: Columbia University Press, 1987), pp. 129-131.
- Kershner, R. B. *Joyce, Bakhtin, and Popular literature: Chronicles of Disorder*, (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1989), p. 204
- O'Leary, Joseph. "Dionysus in *A Portrait of the Artist as a Young Man*," in *Journal of Irish Studies*, 24 (2009), p. 71
- Seidel, Michael. "Monte Cristo's Revenge and Joyce's *A Portrait of the Artist*" in *Modern Critical Interpretations: James Joyce's "A Portrait of the Artist as a Young Man"*, ed. Harold Bloom, (New York: Chelsea House Publishers, 1988)
- Seward, Barbara. "The Artist and the Rose" in *Joyce's Portrait: Criticisms and Critiques*, ed. Thomas Connolly, (London: Peter Owen, 1964), pp. 167-180.
- Skeat, Walter W. *An Etymological Dictionary of the English Language*, 4th ed. (Oxford: Clarendon Press, 1910)

本稿は、愛知大学研究助成個人研究 B「ジェイムズ・ジョイスにおける「変身」の研究」(2011 年度)の成果である。